

一般口演

(7)『黄帝内経』における「心主血脈」

○十河 史代¹⁾, 齊藤 宗則²⁾, 和辻 直²⁾, 篠原 昭二²⁾明治国際医療大学大学院伝統鍼灸学¹⁾, 明治国際医療大学 伝統鍼灸学教室²⁾

要 旨

【背景】

中医学の理論は日本に輸入され、十分な検証無く活用されているのが現状である。

現代の「心主血脈（心は血脈を主る）」は「心主血」と「心主脈」に分けられ、血の運行と生成を主る事とされる。その理論研究の「血脈」と「脈」は同義とされている事や、血の生成に心が関与する事について十分に議論されていない。

【目的】

心が主る「血脈」の定義、心がどの様に「血脈」を主るかを『黄帝内経』の記載から検討する。

【方法】

『黄帝内経』は四部叢刊子部『重廣補注黄帝内経素問』と明刊無名氏本『新刊黄帝内経靈樞』を用い、キーワード「心」を含む文を検索した。次に、得られた条文を五蔵の心とそれ以外に分類し、五蔵の心のうち、「血脈」に関係する文とその他関係する『黄帝内経』の文を用いて検討した。

【結果】

『黄帝内経』における「心」は五蔵の心 214 箇所、それ以外 327 箇所であった。五蔵の心のうち、心と「血脈」に関する文は心と血脈が 3 文、心と血が 3 文、心と脈が 10 文であった。

【考察】

「血脈」を含む文の記載より、心が主る「血脈」は「脈」の一部であり、血が運行する通路を指すと考えられた。

「心主血脈」の血の運行を統括する事に関して、「血脈」中の血は体内をめぐり続けるが、邪気の侵襲などによって停滞し、部分的な血の不足が生じる。よって「血脈」の正常な通行は気血の協調と血量の充足により成立し、心はこれらを維持する事で血脈を主ると考えられた。

次に「心主血」の血の生成の根拠として、陰陽応象大論篇「心生血」がよく挙げられるが、文脈では心と血が同系統である事を示している。他の記載にも心の関与は認められず、『黄帝内経』の原文では心が血を生成するとは判断しがたい。しかし營衛生会篇「乃化而為血…」では、明代・馬蒔の「心中所生之血」とした解釈などを基に、現代では心が血の生成に関与するとされた可能性がある。

以上より、『黄帝内経』における「心主血脈」は心が血を生成する事を主るというより、心が血脈の通行維持を主る事と考えられた。